

◆巻頭言 その2 —暗黙知論の発展的再評価の為に—

日本ナレッジ・マネジメント学会専務理事 山崎 秀夫

人中心のKM展開において中核をなすのが暗黙知理論です。そしてスマート工業社会の課題はポラニー、野中の系譜による暗黙知論を如何に発展的再評価するかにかかっています。但し、再評価と言っても1980年前後に心理学の世界において行動主義が否定され、認知革命が起こったような創造的破壊は必要ないと思います。工業社会からネットに支えられたスマート工業社会への入り口において、経済学、社会学や心理学、脳科学などの基本的な知見が軒並みひっくり返り、見直しが行われています。利他主義を認め、限定合理性を提唱する行動経済学などがその典型例と言えましょう。暗黙知論もそれらとの整合性を取る必要があります。

筆者は暗黙知論の再評価の視点を以下のように考えています。

1、 脳科学や科学人類学における「ミラーニューロン」理論の研究との整合性

ミラーニューロンの発見は、以心伝心、阿吽の呼吸による知識伝承を支える基本であると考えられます。しかし従来の暗黙知研究には「ずれ」が見られます。

2、 同じく「ジェームス・ランゲ説」(ソマティックマーカー仮説)との整合性

手は脳とか目は脳、先に鳥肌が立つなどの末梢神経(身体)と脳の一体関係(身体ループ)を示した理論です。機械の知論の延長線上にあるポストヒューマン理論(人の脳の活動をソフトウェアに変換してコンピューターにダウンロードする論など)への反論となります。但し、過去の記憶の想起や書籍などの情報からも「身体ループ」は働くとされているので暗黙知論との調整が必要です。

3、 認知心理学の「心の理論」との整合性

4、 人類学や進化生物学、進化心理学の社会脳仮説、自然淘汰や性淘汰説との整合性

道具を用い、火を使い、大きな脳を持つと言う狩猟採集時代のバンドの群れと音楽、文学、宗教、物語り、論理性の発達、知識や文化の発達論との整合性が問われています。

道具・・・農業、工業

火・・・エネルギー問題や電力問題は火の再発明

大きな脳・・・コミュニケーションと知識

皆さまの様々な異論、反論を期待します。